

タイトル： 新型コロナパンデミックを生きる(2)

来る来る！と言われながら、来そうで来ない関東地域の大地震、 きっといつか、まさか、今日来るとは！！という日が現実に、来るのですよね。

実際、今の私たちは100年ぶりという本格的な新型コロナパンデミックを経験することにより、歴史に例外がないことを知りました。

前回、私のある友人が英語教育教材を利用して、世界のさまざまな国の英語話者と ZOOM(オンライン会議システム)で交流しているという話をしましたが、スリランカ、インド西方海上の島国、東南アジア諸国、アフリカ諸国にまで、まさに「ステイホーム」が共通のムーブメントになっているとのことでした。面白い、自分からネタ取りに行くジャーナリズムとして慧眼の策ですね。

また、そろそろステイホームの義務が和らぎ始めているのも共通のムーブメントのようです。東西も南北もないパンデミックという意味がまさに世界中の声として感じられます。

このような経験はこれまでに無く、歴史に記録を残すひとつの時代を共有していることをしみじみ感じます。その惨状や各国情勢については皆さんも十分にニュースなどでご存じだと思いますので、ここではベクトルを変えて書いてみます。

国際宇宙ステーションからの情報だと記憶していますが、なんと！この春以降の地球上成層圏までの総二酸化炭素(CO₂)量が激減しているのだそうです。どれくらいの量だったのか失念してしまいましたが、地球上をくまなく10分おきに飛んでいたジェット旅客機が、ほとんど飛んでいない状態になっています。地上でも、個人のドライブ車両が激減し、この二つが同時に起きている事が大きく影響したようです！(なんだ、できるじゃないか！)と、驚いてしまいました。各国が知恵を絞ってCO₂削減に喧々諤々としていた中、新型コロナウィルスによるパンデミック対策となったステイホームの影響が、これほど絶大なものだったのか！！と驚きました。

2050年までにCO₂を50%削減が日本の目標とされていますが、減量させないと地球環境は悲劇的な状況になると言われてきています。環境活動家グレタ・ツンベリさんは「自分は飛行機を使わない」、「国際会議にはヨットで大西洋を渡って行く」と言っています。(そこまでするものか)と疑問に思っていたのですが、なるほど新型コロナウィルスが証明してしまいました。

確かに、世界を股にかける仕事人は格好よく映り、ある程度の身分になると当然のようにビジネスクラスかファーストクラスで飛び回る、そんな着地点を目標にしているビジネスパーソンは多いことでしょう。

しかし首脳でさえ、会議で顔を合わせるにはオンラインでも十分であり、移動、宿泊、会議場、集まるメンバーによっては護衛や対テロ対策など非常に大きな経費と労力を費やすます。今回、リモートにより人のマストな移動は限りなく減らすことが可能であるとわかりました。航空機産業やホテル業界は痛手でしょうが、これまで十分に利益を得てきた関連業界ですので、エコノミークラスを無くしゆったりと座る空の旅は一般の観光客に譲って、経済の維持は人々の余暇によって回転するようにし、自動車産業は真剣にEV(電気自動車)化を進めれば、地球環境の悪化に急ブレーキをかけることができるでしょう。

地球環境を維持すること、即ち森林を維持し、野生動物や未接近の生命同士が近づかないで済むようにすることは、CO₂削減と同じ方法なのだと感じ入りました。そのうえ異常気象や、海産物の激減にも歯止めをかけることにも繋がります。

今回の新型コロナパンデミックは、自国の食料自給率を見直すためにも重要な経験でした。国境封鎖が起きても国民が飢えない余裕を持っていなければならない事を強く意識させられました。今国会を通

過しそうだった「種苗法」もこの危機感から阻止することができるでしょう。

今回の新型コロナ騒動で地方自治体の首長が活躍したように、これからは地産地消の意識をしっかりと根付かせ、若者は都市部の生活に憧れることなく、大学受験を競い、出世を目指しテレワークなどの仕事でただ使われ、働かされるだけの人生を過ごす時代ではないと感じとることが必要ですね。

いつかはAI(人工知能)に追い越され、AIによって仕事を奪われる人間がAIに支配される時点を、シンギュラリティ(singularity: 技術的特異点)と言いますが、いつか来るその時を待つのでなく先にこちらから降りておく、AIにできない創作・創造の道付けをしておくことが人類の将来を救うのだと。

それを気づかされたのがこの、令和二年の新型コロナ騒動なのではないでしょうか？